

おかまの唄

小川未明

青空文庫

松林で、聞きなれた鳥の声がしました。窓をあけると、やまがらやしじゆうからが、枝から枝をつたって鳴いていました。

「僕のがしたやまがらではないかな。」

少年が、じつとその姿を見ていました。遠い町で逃がしたのが、どうして、ここまで飛んでこられよう、と思いました。

戦争のさいちゆうで、もし家が焼けたら、かごの中の鳥がかわいそうだといって、自分ばかりやまがらを逃がしたし、友だちも、おなじ日に、べにすずめを逃がしたのでした。

「君のべにすずめは、南の国へ飛んでいくし、僕のやまがらは、北のふるさとへ帰るだろう。」

二人はよろこんで、飛んでいった小鳥を見送ったのでした。

少年は、それからまもなく、お祖父さん、お祖母さんのすんでいられる田舎へ、疎開しました。この古いお家で、お父さんが子供のとき、本を読んだり、字を書いたりなさったのだろう。またお祖父さんは、

「これから、いろいろの鳥が、裏の林へくる。雪が降ると、山鳥もうさぎもくる。そうしたら、捕ってやるぞ。」といわれました。

青々とした木々の葉が、いつのまにか、みごとに赤く、黄色くいろづきました。すこしはなれた畑には、かきの実がたくさんなつていたし、あちらの垣根のすみには、山茶花が、しめった地面の上に散って、いちめん、貝がらをしいたようでした。

小鳥たちがいなくなつたと思つと、さあつと、風が林をかける音がして、つづいて、パラパラと、なにかの木の実が落ちる小さな音がしました。

「どんぐりかしらん？」

ひとりごとをいって、少年は頭をかしげていました。田舎へきてから、友だちが少ないのでさびしかった。そんなとき、東京がこいしくなるのでした。けれど、いつもお祖父さんが、

「雪が降ると、スキーはできるし、また、きじの子やうさぎを打ってやるから、来年の春まで、こつちにいるがいい。」と、おっしゃると、その気になるのです。お祖母さんまで、

「お正月がくれば、おまえのすきなおもちをついてやるし、甘酒もこしらえてやる

。「と、おっしゃるのでした。」

「なんで少年は、うれしくないことがありましよう。そればかりではなく、せつかくしたしくなった村の学校の学友たちとも、わかれたくなかったのです。それであるから、僕、すっかりなれてしまった。」と、元氣よく答えるのでした。

「ほんとうか。それなら、いつそこつちの子になるか。」と、お祖父さんは、にこにこしながらいわれました。

「いいけど、さびしいんだもの。」

これは、いつわらぬ少年の心のうちでありました。生まれたときから、明るい空、いつも花の咲いている景色しか知らないのが、まったく、ちがった自然に接したからでした。

海を見れば、青ぐろい色をして、波の底には、どんなものがすんでいるだろうかと思われ、高い山を見れば、山の向こうにも町があつて、人や馬が歩いているだろう、と考えさせられるのでした。

急に、耳をすました少年は、

「いまじぶん、雷が……。」と、おどろきながら、二階へ上がって、空を見まわしました。

海の方は、いつものように暗く、おどる波だけが白かった。屋根の上には、灰色、きつね色、だいたい色、さまざまの雲が、かさなりあっていた。そのため、日はかげつていだけれど、雲の切れめから深い穴をのぞくように、青い空が見えました。

「おじいさん、おそろしい絵を見るような景色ですね。」

少年は走りよって、お祖父さんにたずねました。

「こちらは、これからいつもこんな空模様だ。」と、お祖父さんは、気になされませんでした。

あまり遠いので、そのうち、雷の音は下までとどかなかつたが、青白いなびかりのひらめくたびに、雲の峰々を、浮きだすようにてらしました。

たまたま、金色の日の光が、もれてくることもありました。それを見ると、天の上は、いつまでもかわらぬ、おだやかなところであるけれど、下は、雲がみだれて、戦争がつけられていような気がしました。

少年は、よくできた飛行機に乗って、雲の上へ飛んでいきたくなりました。

夕飯のあとは、お祖父さん、お祖母さん、少年の三人が、いろりのはたで枯れ枝や松葉をたき、毎晩のように楽しくお話をしました。

やがて少年は、床へはいつて、お父さんや、お母さんのことを思い出しながら、ねむってしまいました。

あくる朝、目をさますと、お祖母さんは、とつくに起きて、お勝手ではたらいていられました。かまどに火がもえ、ぴかぴか光るおかまから、白い湯気が立ち上っていました。あとから、あとから追いかけては消えてなくなる湯気を見ていると、そのうちに、ぷつぷつと、勢いよく吹き出して、重いふたを動かしました。

「おばあさん、おかまがおこつて、小言をいつているのだね。」と、少年は、床のなかでいいました。

「よくたけたといつて、よろこんでいるのだよ。」と、お祖母さんは笑われました。

「おもしろいな。」

「おまえのお父さんも、小さいじぶん、よくそういつて、このおかまの唄をお聞きなされたのをおぼえている。」と、お祖母さんはいわれました。

少年が、昔からこのおうちでくりかえされるおかまの唄を、とうとく思つて聞きました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「良い子の友」

1945（昭和20）年10月

※表題は底本では、「おかまの唄《うた》」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おかまの唄

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>